ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

ブラジル特報

BRASIL

No.1651
2019年7月号

特集 ブラジル学の奥深さ

・ブラジル黒人にとってのアフリカ

・「ブラジル建築」を求めて西アフリカをさまよう

あの町この町
テレジーナ Teresina

0円

新規会員募集中！
詳しくは P21 をご覧ください。

一般社団法人 日本ブラジル中央協会
URL http://nipo-brasil.org/ E-mail info@nipo-brasil.org
〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄鉱石を安定供給し、世界経済の発展を支える。

ヴァーレ社を通じ、世界最高水準の高品位鉄鉱石を供給。増大する鉄鋼需要に応える。

[Business innovation-2]

水力発電事業を通じ、低炭素社会へのインフラ構築に貢献。

川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

[Business innovation-3]

ブラジルで、そして世界へ。コーヒーと共に至福のひとときを。

Mitsui Alimentos社を通じ、半世紀にわたり愛される「Café Brasileiro」を製造・販売。
これからも豊かな食文化をお届けする。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.

目　次

あの町この町
テレジーナ［小林雅彦］…… 3

ブラジル・ナウ
ブラジル学の昨今 スキッドモア教授を偲びつつ
［編集部］…… 5

【特集】ブラジル学の奥深さ
ブラジル黒人にとってのアフリカ
［矢澤達宏］…… 6

【特集】ブラジル学の奥深さ
「ブラジル建築」を求めて西アフリカをさまよう
［仁尾帯刀］…… 8

第9回日伯賢人会議「2030年の日伯関係の在り姿」
［大前孝雄］…… 10

グリンゴに寄せて「ブラジル日系文学」会長退任にあたって
［中田みちよ］…… 11

ブラジル現地報告
移民受入れから150年のブラジルに学ぶこと［平野 司］… 12

連載・日系企業シリーズ第 59 回
アマゾンで始まった高砂香料ブラジル事業
［碧川琢哉］…… 13

連載・ビジネス法務の肝
業務委託する際の注意点［柏 健吾］…… 14

連載・税務の勘どころ
相互協議（MAP）の改正［エドソン・コスタ／吉田幸司］… 15

エッセイ
日本は第二の故郷 サッカーの発展に尽くす
［ジーコ］…… 16

ウーマン・アイ
日系人のこれから［伊豆山ありさ］…… 17

ジャーナリストの旅路
引き継ぎたい五輪ボランティアの笑顔［宮本英威］… 17

連載・文化評論
ジョルジ・アマード『奇蹟の家』再訪 ブラジル学との関係性
［岸和田仁］…… 18

最近のブラジル政治経済事情 …… 19

キャンパス・コラム
留学生活での気づき カンピーナスでの「ビーサン」文化
［梨本卓也］…… 19

新刊書紹介 …… 20

新連載・ブラジルあれこれ
労働訴訟ーブラジルで２度被告になった話 …… 20

協会からのお知らせ …… 21

写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」

「リオ北部チジュカの、土曜日のランチタイム。歴史のある地区で、チジュカーノと呼ばれる住人たちは、地元愛が強いといわれている。イタリア料理の店では、普段着の家族連れなどがくつろいでいた。」

（永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち３ブラジル」（偕成社）等。www.hikarunagatake.com

あの町、この町

テレジーナ Teresina

ピアウイー州の州都テレジーナは、人口約86万人（IBGE/2018）、ノルデスチでは唯一内陸部にある州都だ。2015 年に FIRMINO FILHO 市長が創設した「武道の日」の催しに呼ばれ訪問したのをはじめ数度訪問する機会があった。地元の人が、もう数か月雨が降っておらず、暑い日が続いていると語っていたのが印象的だ。

ピアウイー州は、2018 年のブラジル州別競争力ランキング（RANKING NACIONAL DE COMPETITIVIDADE DOS ESTADOS/CENTRO DE LIDERANÇA PÚBLICA：環境、行政、教育などの 10 項目で評価）で 26 州中 21 位と振るわず、教育面の評価でも全国平均を若干下回るが、個別の学校で見ると全国高校ランキング上位を占めるテレジーナの高校があるなど健闘している。

テレジーナには、「ピアウイー州日本文化センター」があり、日本文化・日本語の普及を行うとともに、日本への国費留学を希望する学生に対する情報提供等支援を行っている。管轄 4 州の国費留学生の選考ではセンターの支援を受けた候補者は、いずれも素晴らしい成績で毎年合格者 2～3 名という狭き門を突破してほぼ毎年合格していたことを思い出す。

会長の中山征治さんは、移住者として訪伯、大学を卒業後、長くピアウイー州知事の補佐官を務めた人だ。「武道の日」を定めた市長は、中山さんの柔道の弟子でもある。最近、国費留学生交流を契機として、私立 UNINOVAFAPI 大学と新潟大学歯学部との学術交流協定が具体化している。

▲ピアウイー州の CARNE-DE-SOL 発祥の地といわれる CAMPO MAIOR（テレジーナから約80キロ）の専門店

テレジーナでは、名物料理を食べるのが楽しみだった。まず CAPOTE（一般的には、GALINHA-DE-ANGOLA）と呼ばれるほろほろ鳥の料理。ピラフ風混ぜご飯（ARROZ COM CAPOTE）がおいしい。同地を訪れ、この食材が気に入り、設宴用に中山さんに頼んで取り寄せていた日本人幹部駐在員もいた由。ノルデスチで人気の CARNE-DE-SOL も郷土料理の代表格だ。名前からして、天日干しの肉を想像するが、実際には風通しの良い室内で乾燥させたもののようだ。市内に専門店がたくさんある。また、市内をめぐると、家々の軒先につるした牛肉や鶏肉が目に付くので自家製のものも食べられているようだ。ブラジルには、他にも CARNE　SECA や CHARQUE と呼ばれる干し肉があるが、いずれも製法や味は異なる。さらに、地元の人が二日酔いにいいと勧めてくれるのが、PANELADA と呼ばれるモツ煮込み料理だ。市内の公設市場内の大衆食堂で食べるのがおすすめだ。

小林雅彦（前在ベレン領事事務所長）

gilsonmartins
Rio de Janeiro

ジルソン・マルチンス 日本初上陸

ブラジル、リオデジャネイロの人気バッグブランド
ジルソン・マルチンスが日本初上陸！

ジルソン・マルチンスの商品は直営店または
ウェブショップにてお求めいただけます。

colorídas
brazil × tokyo

ウェブストアのご注文はこちらから！
online shop.
https://shop.coloridas.jp

colorídas SHOP Aoyama
東京都渋谷区神宮前 3-38-11
原宿ロイヤルビル 1F 2号室
営業日：火～土 13:00～19:00（日･月曜 定休日）

colorídas
ジルソン･マルチンス日本輸入総代理店
東京都渋谷区神宮前 3-42-11 ローザビアンカ 201
コロリーダス株式会社
MAIL：bio@coloridas.jp TEL：050-5585-1090
WEB：http://coloridas.jp

BOTECO
Bom Fruto
TOKYO

至福のサウダージをボテッコ・ボンフルートで

Moqueca
Feijoada
Picanha na Chapa

東京にありそうでなかったブラジリアン・バル
日本橋人形町に本格BOTECOついに登場

住所：東京都中央区日本橋人形町2-1-7
リビオ日本橋人形町105
ご予約：050-1108-3818
アクセス：水天宮前駅徒歩1分
人形町駅徒歩3分
HP：www.bomfruto.com

ブラジル学の昨今 スキッドモア教授を偲びつつ

ブラジルの出版界で社会科学系では老舗といえるPAZ E TERRA社が2002年に刊行した『O Brasil dos Brasilianistas（ブラジル学者のブラジル像）』は、索引も入れると512頁もの分厚い研究書であるが、ブラジル研究に関心を有する者にとっては玉手箱のような本だ。再読しても三読しても新しい発見があるからだが、この本を読めば、ブラジル研究が質的にも量的にも一番進んでいる国は旧宗主国のポルトガルでも文化先進国フランスでもなくて“北の大国”米国であることが了解されてしまう。

サブタイトル「1945年から2000年までの米国におけるブラジル研究のガイド」でもわかるように、この書は在米ブラジル大使館の後援で進められたプロジェクトの成果をまとめたもので、米国人ブラジル研究者とブラジルの研究者がタイアップしてテーマ毎に整理された論稿がいくつも収められている。最終章で、英国やフランスにおけるブラジル研究についても略述されているので、この著作は、アメリカ、イギリス、フランスの3か国におけるブラジル研究の、いわば総棚卸といってよい。それだけに、この本を読み直すと、こんな研究もあるんだあ、とコーフンすることになるワケだ。

この書によれば、ブラジル研究者の意味で“Brazilianist”という単語が米国の文書に初めて登場したのは1969年である。これは、キューバ革命のインパクトを受けてラテンアメリカ地域研究が1960年代に燎原の火の如く急展開した、という時代の文脈の一環と理解すべきだろうが、たしかに1970年代に入ると、米国におけるブラジル研究が“広く深く”展開されるようになる。

そうした新世代のブラジリアニストのなかで最もポレミックにして知名度が高かったのが、トーマス・スキッドモア教授（1932～2016）であった。ドイツ近代史とりわけビスマルク以降の研究で博士号をハーヴァード大学で取得し、同大学講師となった若き歴史学徒が、ラテンアメリカ特にブラジル研究に“宗旨替え”し、ポルトガル語を初歩から勉強して、初めてブラジルを調査訪問したのが1960年であった。

ブラジル史研究家として最初に発表した著作は、『ジェトゥリオからカステロへ』（原著1967年）であったが、これは、1930年革命によって権力を奪取し、「エスタード・ノーヴォ（新国家）」と呼ばれる実質的独裁政権を堅持したジェトゥリオ・ヴァルガスから1964年までの近代史を読み込んだうえで、何故軍事政権が誕生したか、を解明した論稿であった。いわば、ドイツ史研究のノウハウをブラジル史研究に柔軟に適用した成果であったが、彼の次の関心が向かった対象時期は、その時代（1930～1964）の前、1870年から1930年までであった。世界最大の黒人奴隷受入れ国にして、奴隷解放（1888年）が世界で一番遅かったブラジルが、欧州移民を大量に受け入れて「黒く混血してしまった国民」を「白色化」するための政策を裏付けた人種理論を解明しようとの目論見が、労作『Black Into White』（原著1974年、ポルトガル語版『Preto No Branco』1976年）に結実する。米国の黒人奴隷制廃止後の人種関係とブラジルにおける人種に関する言説（当時の知識層による言説）を比較研究したもので、サブタイトルが「ブラジル思想における人種とナショナリティー」となっているが、ブラジルの読書界でも広く受け入れられた名著である。そのさわりの部分を若干引用すると、

「科学的人種主義論としてのアーリア人種優越論は、1888年から1914年までの期間、ブラジルのインテリ・エリート層によって歴史的決定論として受容されていたため（人種問題へのブラジル的解決案としての）白色化論は、ブラジルのエリート層の大部分から受け入れられていたが、これはブラジルに特有なもので、欧州や米国では“科学的解決案”として採用されたことはなかった。」「（ブラジルにおける）科学的人種主義論は、1930年代には雲散霧消していた。」

すなわち、1870年代から1930年代に至るブラジル近代史のなかで、人種差別を容認する議論から人種デモクラシーを志向するように変化していく経緯が、巧みに叙述されている。

その後も多くの研究業績を残したスキッドモア教授は晩年アルツハイマーを発病し、2016年6月に亡くなったが、ブラジルの主要メディアがかなりの紙面を割いて追悼記事以上の報道をしていたことは記憶に新しい。

ブラジル学とは何か、ブラジル研究のあり方とは、との素朴な質問に対する、一つのモデル回答が、スキッドモア教授の業績と研究姿勢にある、と思われるのだが、では、ひるがえって、日本におけるブラジル学の実績はどう評価されるのだろうか。ブラジル学に関心を有するわれわれとしては、これまでの実績を踏まえて、新たな研究が深耕されていくことを切に期待している。

『ブラジル特報』編集部

ブラジル黒人にとってのアフリカ

矢澤達宏
（上智大学教授）

パン・アフリカニズムの他の事例を求めて、世界有数の「黒人大国」に

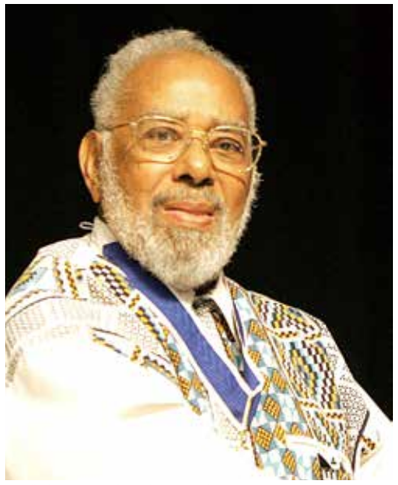
もう四半世紀も前のことになるが、1990年代なかば、私は研究留学のためサンパウロに滞在することとなった。学部生の頃、米国やかつての英領・仏領カリブの黒人知識人が、植民地下のアフリカ人エリートと連携しつつ、アフリカの復権や独立を訴えたパン・アフリカニズム運動のことを学んだ。おおいに感銘を受けた私は、大学院に進学して、米国や英領・仏領とは違う地域の黒人たちの動向を追いかけてみたいと考えたのだった。その途中、ブラジルへの留学を決めたのは、同国の黒人たちの地位向上、境遇改善に向けた闘いの歴史を詳しく学び、そのなかでルーツであるアフリカをどのように位置づけてきたのか知りたかったからにほかならない。まだインターネットの普及していなかった時代、現地に実際に行かなければ、断片的な情報すら満足にはえられぬ状況だった。

ところで、なぜブラジルだったのか。それは、米国や旧英領・仏領カリブ以外の米州では、もっともネタのありそうな国だと直観的に感じたからである。かつておびただしい数の黒人奴隷を抱え、それゆえこんにちも黒人の数が多く、しかも豊饒なるアフリカ系文化を誇っている――。私が抱いていた印象はおおよそそのようなものだった。実際、大西洋奴隷貿易では米州にもたらされた奴隷の半分近いおよそ46%がブラジルに流入したと推定されているし、直近の国勢調査（2010年）では「黒色」と「褐色」をあわせたアフリカ系の人口はおよそ9680万人で、全人口の50.7%を占めている。人口構成比でいうなら黒人の比率がもっと高い国がカリブ海地域にはいくつかあるが、黒人の絶対数でいうとサハラ以南のアフリカ地域も含めた全世界でも、ブラジルを上まわる国はナイジェリアくらいしか存在しない。この点をもって、20世紀を代表するブラジルの黒人運動家であった故アブディアス・ド・ナシメントはかつて、ブラジルを「世界第二の黒人大国」と評した。

特定の人種やルーツの強調はタブー

そんなブラジルに意気揚々とのりこんだ私は、何を研究しにきたのかと問われるたび、ブラジルの黒人とアフリカとの関係を研究したいのだと答えた。すると、きまって返ってきたのは、「ああ、奴隷貿易ね」という反応だった。「いや、そうじゃなくて奴隷制廃止後の…」と言い直しかけると、「あっ、カンドンブレの研究？」とくる。こんなパターンがじつに多かった。それも否定し、自分の意図を説明すると、「ふーん、そうなんだ」となり、会話はそれ以上つづかない。相手の顔に怪訝な表情さえ浮かんでいることもしばしばだった。まるで、アフリカはブラジルの黒人にとって何代か前の先祖の単なる出身地にすぎず、こんにちの黒人とのあいだをつないでいるのはカンドンブレくらいのものだとでもいわんばかりに。自分が予期していたのとは異なる空気を感じてとまどいをおぼえたが、本当に当惑させられたのは、当時ブラジルの書店や図書館で目にした黒人関連の書物の大部分が、実際に奴隷貿易・奴隷制やカンドンブレに関するものだったことである。

その背景に気づき、こうした状況に合点がいったのはしばらく経ってからのことだった。それは、ブラジル社会の特質を「人種民主主義」だとする見方の余波だったのである。「人種民主主義」とは簡単にいうなら、ブラジルは先住民、白人、黒人の人種的・文化的融合からなり、いずれの集団も対等なかたちでそこに参与している状況のことである。こうした前提に立てば、黒人のみで組織化したり、ルーツであるアフリカを強調したりするのは、黒人を疎外し、差別していたかつての米国のような国であればこそ道理もあるが、ブラジルのように黒人をなんらの壁もなく受け入れている国においては正当な根拠などありえない。ありもしない分断や対立を煽り、国の統合すら脅かすことになりかねないということになる。だから、黒人研究は歴史と文化の分野に閉じ込められてしまったのだ。黒人の問題が現代のブラジルにおいてけっして政治化することのないように。



アブディアス・ド・ナシメント
（2006年、Wikimedia Commons）

「人種民主主義」は1930～40年代のヴァルガス独裁体制のもとで喧伝され、60～80年代の軍政のもとで「国是」とされた。私が留学でブラジルに赴いたのは、民主化を経て「人種民主主義」がすでに否定されつつあった頃だったが、学問におけるその爪痕はまだ生々しいままだった。

ブラジル黒人戦線の式典の様子（1935年、Arquivo Arthur Ramos, Acervo da Fundação Biblioteca Nacional - Brasil）

封印すべきルーツから触発、インスピレーションの源へ

黒人の側からすると、しかし、「人種民主主義」などみじんも実感できるものではなかった。20世紀前半にサンパウロで多数発行された黒人新聞の紙面には、人種偏見・差別についての苦情や告発が踊っている。誹謗・中傷の類いはもちろんのこと、映画館、ホテル、レストラン、バー、理髪店、ダンスパーティー、孤児院、修道会などからの締め出し、サンパウロ市警備隊への採用拒否など、黒人たちが理不尽な扱いを経験した場面は経済社会生活の多岐にわたっている。

だが、この頃の黒人たちはルーツに自分たちの闘いを後押しする力を求めることはなかった。当時猛威をふるっていた人種主義思想は黒人たちさえもとらえずにはおかず、劣等性の烙印を押され植民地支配に甘んじていたアフリカから、むしろみずからを切り離すことにより一人前のブラジル市民としての資質をアピールしようとした。彼らはカンドンブレのような「野蛮な」信仰を捨て去り、「品行方正」であることをブラジルの黒人に求めた。誰もが背広に身をつつみ、ネクタイをしめているこの時期の黒人運動家たちの服装が、彼らの方向性を端的に物語っている。しかし、身なりや行動でいくら白人と変わらぬことを示しても、彼らの境遇はよくなりはしなかった。

20世紀後半になり、アフリカが植民地支配から脱しはじめ、各地で新興独立国が誕生するようになると、名誉回復のなったルーツに対し、期待を込めたまなざしがブラジル黒人のあいだからも向けられるようになっていく。その筆頭格が、さきにも触れたアブディアスである。ブラジルの黒人も、アフリカ人が経験してきた搾取、抑圧、人種主義の歴史を共有してきたのだと彼は主張し、ブラジルがけっして「人種民主主義」の国などでないことを訴えた。また、国際問題化していた南アフリカをはじめとする少数の白人たちがアフリカ人を支配する体制とブラジルを重ね合わせ、それら南部アフリカの諸地域と同様、ブラジルも白人が少数者集団であるにもかかわらず、国民の多数を占める黒人を不当に支配してきたと非難した。「人種民主主義」という美名のもと不可視化されてきた黒人をめぐる問題の本質を鋭く提起した主張だったが、いかんせん軍政のもとでは過激にすぎた。1968年、アブディアスは体制による迫害から逃れるように米国に渡ると、以後は民主化に向けた動きが本格化するまで国外からブラジル黒人の問題を訴えた。

言論でなく芸術的表現によってブラジル黒人の闘いやアフリカへの共感を発信する主体も現れてきた。サルヴァドールの貧困地区を本拠に1974年に誕生した、ブロコ・アフロ（アフリカ色の強いパフォーマンスを特徴とするカーニバルのパレードに出場するグループ）にして地域文化団体であるイレ・アイェはその代表格である。75年のカーニバルより、アフリカやブラジルの黒人にまつわるさまざまな主題を毎年選び、それに基づく歌唱、演奏、ダンスのパフォーマンスを単に披露するのみならず、事前に小冊子を発行し、それぞれの主題について学ぼうと呼びかける啓蒙活動もおこなってきた。創設者のヴォヴォは、ちょうど最高潮を迎えていたギニア・ビサウ、アンゴラ、モザンビークなどポルトガル領植民地における独立戦争に触発されたことが誕生のきっかけだったと語っている。

ルーツたるアフリカの復権が持つ意義

米国の著名な人類学者ハースコヴィッツはかつて、白人と同様、黒人もまた自身のルーツであるアフリカの過去に偏見を抱き、それを隠そうとすることが黒人に対する偏見をいっそう助長しているのだと主張した。したがって、アフリカの過去を正当に評価し、それを受け継いでいることに黒人自身が誇りを持つことこそ偏見の解消につながるのだと。かつて米州のパン・アフリカニストたちがアフリカの地位向上にとりくんだのも同じ理由だった。兄弟たるアフリカ人のためばかりでなく、それはアフリカの血をひく自分たちのためでもあったのだ。初等・中等教育におけるアフリカ系ブラジル人の歴史と文化の必修化を定めた法律10639号（2003年）が、その具体的教育内容にアフリカおよびアフリカ人の歴史まで含めているのは、ハースコヴィッツの見解を踏まえればじつに正鵠を射たことだと理解できる。ブラジルのルーツのひとつとしてアフリカに対する正当な認識が進むとともに、そのことがブラジルの黒人や彼らの文化に対する認識をあらためさせ、偏見の緩和につながっていくことを願ってやまない。

イレ・アイェのCD『カント・ネグロ』（1996年）

「ブラジル建築」を求めて西アフリカをさまよう

仁尾帯刀
（写真家）

オリシャの信仰や祝祭、アカラジェに代表される郷土料理など、サルヴァドールを主としたトドス・オス・サントス湾沿岸地域は、西アフリカのヨルバの影響色濃いアフロブラジル文化が魅力だ。

19 世紀後半まで長きに及んだ大西洋奴隷貿易により、アフリカとブラジルの間の文化的影響は、アフリカ側からブラジルへと及ぼされた事象が圧倒的に多い。

そんななか 19 世紀前半から同世紀末まで、主にサルヴァドールから、かつての奴隷海岸（ガーナからナイジェリアに及ぶ沿岸地域）に帰還した（あるいは送還された）元奴隷がいたことは、ブラジル人でも知る人は少ない。帰還者の数は 7 ～ 8 千人だったと論じる文献もある。

帰還者の多くは、再び奴隷狩りに遭うことを避けるなどの理由から、内陸の出身地には戻らず、沿岸地域で土地の住民とは異なる共同体を築いた。帰還者はガーナで「タボン」、ベナン、ナイジェリアで「アグダ」または「アマーロ」と称され、今でもその子孫が共同体を維持している。

私は、サンパウロを拠点に、主に建築や都市景観を撮影する者だが、この帰還者の西アフリカに及ぼした影響に惹かれたのは、既に絶版となっているマリアーノ・カルネイロ・ダ・クーニャが 1985 年に発表した「奴隷小屋から戸建住宅へ－ナイジェリアとベナン人民共和国におけるブラジル建築（Da Senzala ao Sobrado – Arquitetura Brasileira na Nigeria e na República Popular do Benim）」という本からだった。特に巻末に付加された写真家ピエール・ヴェルジェによる西アフリカのブラジル建築に関する写真集が、意外性ゆえに眼を引いた。

ピエール・ヴェルジェと言えば、サルヴァドールなど街でのスナップやポートレート、あるいはアフリカとブラジルにおける宗教文化の絆など、人を被写体とした写真作品で有名だ。しかし 70 代前半のヴェルジェが、1970 年代半ばに、この本のために撮影した写真は、いずれも建築を主体としており、芸術性はさておき史料として希少価値の高いものだ。

主に学者からブラジル建築と呼ばれる西アフリカの建築物は、帰還者らが、ブラジルでの奴隷労働下で習得した技能をもとに、ブラジルのコロニアル建築を模して建てたものと、20 世紀前半になって各地の建設者が、帰還者の建築をさらに模して建て、普及したものを指す。

私は、これらの建築物を自ら撮りたいという思いを企画書にまとめ、ブラジルの文化財団 IMS から助成金を得て、2017年12月から翌年1月までの約 50 日間、ベナンとナイジェリアを旅して回った。

ナイジェリアのラゴスからバスで国境を超えてベナンのポルト・ノーヴォを訪れ、再び戻ったナイジェリアではラゴスから乗り合いヴァンを乗り継ぎ、イレ・イフェ、イレシャ、オショボ、オボモショ、イバダン、アベオクタというヨルバランド（ナイジェリア南西部内陸のヨルバ人の地域）の街々を巡った。

それらの街にはグーグル・ストリートヴューによるウェブ画像はない。頼るべきは、知人に紹介してもらったまだ知らぬ地元の人々と、サルヴァドールのピエール・ヴェルジェ財団から提供してもらったヴェルジェが 45 年前に撮影した詳細不明の家屋の写真の複写のみであった。

ベナンには、アグダのコミュニティが点在するにも関わらず、私がポルト・ノーヴォのみを訪れたのは、フランス語を解せずとも、その街に現存するブラジル建築の最高傑作である大モスクを自らの眼で見て撮りたかったからだ。

帰還者ジョゼ･ベケーノ･パライーゾによって1935年に建てられたそのモスクは、ファサードの両脇に塔を構える、サルヴァドールのサンフランシスコ教会などの様式を模したもので、ブラジルからの影響が実感できる建築物だ。ファサードの中央最上部にイスラムのシンボルである星と三日月を冠しているが、外装のレリーフからは、教会建築としてブラジルで普及したバロック様式の影響が伺える。

これまで見てきたブラジルの教会建築の数々を思い出しながら、ピントグラスに写る眼前の教会に焦点を合わせた。

▲ラゴスのウォーターハウス。ブラジル人小説家アントニオ・オリントが帰還者のロマンスについて描いた「ア・カーザ・ダ・アグア」の着想の源でもある。

開発で失われるラゴスのブラジル建築

ナイジェリアの商業都市ラゴスは、都市圏を含めると人口およそ 2,100 万を抱え、既にエジプトのカイロを上回り、アフリカ最大となったとも言われる街だ。ラゴス島の中心部に、電信柱の一部や家屋の塀が黄色と緑に彩られたエリアがある。カンポス・スクエアという名のその一角は、かねてからブラジルからの帰還者が集住してきたエリアで、今もブラジル系子孫の会（Brazilian Descendants Union）という団体が活動している。

「私が子供の頃には、まだポルトガル語で会話する大人がいたものです」と今年 67 歳になる同会会長のグラシアーノ・マルチンスさんは語る。

それよりも時代は遡るが、今ほどに街に人口が密集していなかった 1880 年代に、ブラジルからの帰還者はラゴスの人口の 9%を占めるほどだったそうだ。

ヴェルジェの写真が示すとおり、かつてラゴス島には、帰還者が建てた、まるでブラジルの歴史地区にあるような外壁が漆喰で塗装された 2 階建て家屋が数多く立ち並んでいた。これらブラジル建築の家屋は 1850 年代から現れ、1880 年代にはずいぶん普及していたようだ。

マルチンスさんに案内されてエリアを撮り歩いたが、国一番の商業都市とあって、家屋の多くは、既にビルに取って代わられていた。

そんななかラゴスの代表的なブラジル建築として残るのが、カカワ通りに立つ通称ウォーターハウスだ。ベージュのタイルで覆われた外壁に、アーチ状の窓枠が並ぶその邸宅は、ポルトガル由来のブラジルコロニアル建築の影響が著しい。

この家屋を建てたカンジド・ダ・ロシャという人物は、ラゴス島で初めてであった水道管をメインランドから自邸まで敷き、水を売ることで財を成したラゴス初の富豪として伝えられている。

帰還者には、ブラジルの奴隷制の下で身につけた技能や、ブラジルとの貿易で富を得た者が多かったそうだ。その大半がカトリック信者で、ブラジル料理や西洋風の衣服をアイデンティティの拠り所として、土着の住民と一線を画した共同体を形成してきたのであった。

▶ポルト･ノーヴォの大モスク。両脇の塔は鐘塔ではなく、礼拝を呼びかけるミナレットだ。後世に残すべき歴史と美しさを備えるが、今後の保存が気がかりだ。

かつてヨルバランドで広く普及

カルネイロ・ダ・クーニャは、「ブラジル風家屋は、都市住宅の大多数を占め、ヨルバの地においてはその約 90%を占めていた」と先述の書籍で綴っている。またナイジェリアのオバフェミ・アウォロウォ大学建築学部のコルデリア・オサソナ教授は、「この国のヴァナキュラー建築に見られる最も際立った影響はブラジル由来だ」と 2017 年の論文に記した。

ヨルバランドのブラジル建築の家屋は、ラゴスのそれと比べると作りが簡素ながらも多様だ。一見してブラジルのコロニアル建築の影響が見て取れるものがあれば、そうではないものもある。その多様性はそれらの家屋のほとんどが、帰還者によらず、地元の職人の摸倣によって建てられたもので、ブラジル以外の要素が複雑に入り混じっていることによる。

コロンビア・カレッジの人類学者ジョン・マイケル・ヴラック教授によれば、ヨルバランドにおいて、ブラジル建築が増えたのは 1930 年頃からだそうだ。英国の植民地統治により、各地の王や酋長の権力が弱体化するなか、主にカカオ栽培による新興富裕層が、目新しい 2 階建て家屋を富の象徴として求めたのに加え、キリスト教の普及が一夫多妻制の家族のあり方を変え、住宅に望まれる様式が変わったのがブラジル建築の広範にわたる普及を導いたと論じている。

ヨルバランドのブラジル建築の主な特徴は、玄関ドアや窓の枠、あるいは屋根の縁に手の込んだ装飾が施されていることや廊下が家屋の中央を貫き、左右に概ね同じ大きさの部屋が並ぶことなどで、その多くが 2 階建てだ。

ヨルバ人が、なぜ英国風建築ではなくブラジル建築を好んだかは明らかではないが、ヴラックは、前者がナイジェリアの植民地支配の象徴であったことに加え、後者の装飾性の高さがヨルバ人の好みと合致したからであろうと推測している。

私の撮影に話を戻せば、45 年前の白黒写真のみを頼りにヴェルジェが撮った家屋を見つけて撮影するのは、まるで競争相手のない宝探しに耽けるようであった。

さて、私のブラジルへの関心の発端は、青年時代のひと時を西アフリカのガーナで過ごした経験だった。それがあってのこの度の撮影旅行だったのだが、近い将来、再びベナンとナイジェリアを訪れ、撮影を継続するつもりだ。なぜ撮りたいのかといえば、ここで紹介した文化継承の歴史以上に、ブラジル建築に朽ちてなお備わる美しさに惹かれるからだ。目下、新たな助成を得られるべく試行錯誤中だ。

◀イレ・イフェの王宮のそばに立つブラジル建築の家屋。ヴェルジェの写真を頼りに歩いて探した。本文紹介のオサソナ教授が私費を投じて修繕した。

第９回日伯賢人会議
「2030年の日伯関係の在り姿」

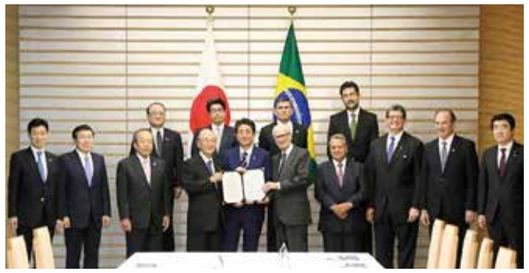
大前孝雄
（当協会会長）

第９回日伯賢人会議

去る4月8日、日本側賢人6名、ブラジル側賢人4名を迎えて第９回日伯賢人会議が東京で開催された。私は同会議のコーデイネーターとしてこれに参加、また、今回からブラジル側より Joaquim Levy ブラジル経済社会開発銀行 BNDES 総裁（元財務大臣）、Luiz Fernando Furlan 氏（元商工開発大臣、現 BRF 社経営評議会議長）が新たなメンバーとして加わった。

日伯賢人会議とは

遡ること2004年9月、日伯首脳（小泉総理、ルーラ大統領）会談において、理想的な日伯関係の在り方につき提言を纏めるため「日伯21世紀協議会」が設立され、2006年7月、7分野にわたる提言を両国首脳に提出した際、そのうち経済分野における提言「日伯経済関係の再活性化」のフォローアップを目的として、両国の経済関係に密接に関わる経済人による政策対話の枠組み「日伯戦略的パートナーシップ賢人会議」が創設された。それから10年余が経過、今回は一つの節目と位置付けられる会合となり、過去8回の会合で討議された主要テーマと提言内容及び具体的な成果につき振り返るとともに、10年後の「2030年における日伯関係の在るべき姿」という大命題の下、**①産業連携の強化　②人口問題と食糧問題　③日伯両国間の人的交流の促進・強化**という３つのサブテーマを設けて終日活発な議論がなされた。



▲提言書を安倍総理大臣へ
賢人メンバーより手交
「官邸ホームページより」出典

◀賢人メンバー、
サントクルス長官、他
「官邸ホームページより」出典

また、今回は新たな試みとして活発な討議を引き出す呼び水として当協会会員の堀坂上智大学名誉教授による「日伯2030年に向けて新たなシナジーを」と題するキーノート・スピーチ、及び、今年１月に誕生したボルソナーロ大統領率いる新政権に対する評価及び期待につき日伯双方の賢人による意見交換がなされた。

第９回会議の提言書

今回の討議の結果として以下内容の提言書が纏められ、翌９日に日伯双方の賢人から安倍総理へ直接手交された。

●メルコスールとの EPA 締結促進の為、関係国政府間の早期公式対話の開始を求める。

●イノベーションによる「100年に一度の変革期」を生き抜くため、ブラジル・コストの改善、インフラ整備、規制緩和、柔軟なルールの運用、知財保護等における世界標準を両国政府がイニシアティブを取って作り上げていく。

●拡大する世界の食糧需要に対する一大供給国としてのブラジルの農業生産拡大に向けた新技術の導入、ロジ・インフラ改善における日伯両国の連携強化

●両国間の人的資本の交流を促進するために教育制度、受け入れ体制等を整え、国際社会で活躍する人材をより多く輩出するための施策を官民で推進

今回もう一点特筆されることとして、ボルソナーロ大統領が官民パートナーシップによる両国関係強化に少なからず貢献しているこの賢人会議という対話の枠組みを高く評価されていることから、その意を受け大統領の右腕とされるサントス・クルス大統領政府調整庁長官が多忙なスケジュールの合間を縫って本会合に特別参加、ブラジル政府が最優先課題の一つとして推進する官民連携によるインフラ整備促進に向けた施策「PPP」（Public Private Partnership）とこれに対する民間投資を含めた日本への期待につき話され、新政権の日本に対する期待の大きさが窺えた。

この賢人会議は経団連とブラジル全国工業連盟（CNI）が年次開催する「日伯経済合同委員会」（今年は第22回会合が7月29～30日サンパウロにて開催予定）と緊密に連携しつつ引き続き両国の関係強化に努めていく。

グリンゴに寄せて
「ブラジル日系文学」会長退任にあたって

中田みちよ
（「ブラジル日系文学」編集長･会長）

「ブラジル日系文学」誌は引き続き発行

最近　こんなことがわかった。

ひとは新聞雑誌を、読みたいように読むものだということである。私は「ブラジル日系文学」の会長・編集長として、【武本文学賞】は第36回をもって終了する。そして文学賞そのものはサンパウロ文化福祉協会の「文芸賞」と合体して、日系社会唯一の文学賞とする、と発表したのに、雑誌発行は中止したと受け止められていること。

あちこちで、日本語主体の「会」が扉をしめているので、その一環だと思われたのかもしれない。私自身も発表の仕方が悪かったかと反省もしたが、つまるところ、ひとは読みたいように読むものなのだということが分かった。

日本移民110年の歴史と日系文学誌

さて、10年前編集を引き受けるようになって心がけたのは、苦労話や詠嘆はやめようということだった。かつて、サウダーデに身をやいた人たちは、それを凌駕して、この地の生活を享受している。それを書かないでどうしよう。

▲第36回（最終回）武本文学賞授賞式

110年という時間がサウダーデを濾過している。また、出稼ぎという方法もできて、故郷にも簡単に足を運べる。ところが、皮肉なことにサウダーデという言葉を頻繁に使うのは日本人のような気がする。ブラジルを語るとき、移民はサウダーデに身を焦がしているというステレオタイプの認識である。ああ、移民というものを知らない、と思う。

むろん、私たちにもサウダーデはある。それはしかし、はるかかなたに置き去りにした暮らし。白い花を咲かせたコーヒー園であり、降霜を防ぐために焼いた枯草や、温度が一段と落ちる夜明けの冷たさ、それに比して暖かった井戸水に対するサウダーデで、すでに日本そのものではない。これは110年という年月の重みである。

日本移民と欧州移民

ブラジルは移民の寄合国家である。ブラジルの日本移民の特殊性として、識者は家族形態をあげるが、構成家族は日本移民だけの特殊事情ではなかったはずだ。苦労話はどこの国の移民たちにもあったはず…そう思って周囲を見渡すと、とりあえず、ポーランド系作家の Samuel Rawet の「移民物語」という作品があった。そのなかに「ガイジンの子」という短編がある。これは日本在の小高利根子翻訳で本誌（25号）に掲載されているが、サムエルも移民の子である。原作は「gringuinho」。私たちは白人系を「ガイジン」と呼ぶが、そのガイジンに相当するブラジルの俗語が「グリンゴ」である。

「ガイジン（グリンゴ）の子、やーい」、「ガイジン（グリンゴ）の子、やーい」というからかいを「ジャポネース」に置き換えると、そのまま日系のはなしになる。結局は同じだね、と思いながら読んだ。

先年、リオグランデ・ド・ノルチ州のナタール市で冬休みを過ごしたとき、その地はヨーロッパに近いこともあって、現地でよく耳にしたグリンゴいう言葉が胸にストンと落ちた。バカンスでやってくる金髪青年（グリンゴ）が１～２週間契約するモレナたちがいるのだ。やってられないわ、と舌打ちしたが、これもまたブラジルの現実である。

そういえば手塚治虫の最後の作品に「グリンゴ」という未完のマンガがあるが、ここでの「グリンゴ」は、日本人はブラジルでは「ガイジンだよ」と暗喩的に使用されている。そうだったのか、と最近になってようやく気がついてほろ苦い。

最近の「ブラジル日系文学」誌

「ブラジル日系文学」は最近、翻訳が多いですねといわれるが、日本語の書き手が櫛の歯がかけるように冥界に去っていくなかで、移民という目線でみれば、ポルトガル語で書く彼らもまた私たちの仲間だという認識がある。だから翻訳して読んでもらおう、と思う。もうひとつ、その延長線に日系２・３世の群像がいる。

かつては経済的なことを指標にして職業を選んだ日系の子弟にも、文学を志す人たちが現れていることである。まだ無名で力が弱い彼らに誌面を提供し、職業的成長のなにがしかの足しになりたい、とつよく思う。それが作品を取り上げる理由であり、理事会を彼らに託した理由でもある。【武本文学賞】がなくなって、残念だといわれる。36年も続いたのに…しかし、主催者として私は晴れやかな気分でいる。36年も続いたからこそ、交替・刷新しなければならないのである。それが継続というものだと考える。

（編集部註：在ブラジル日本語文学活動の中核となっている定期刊行誌は、「コロニア文学」誌が1966年から1978年まで32冊、「コロニア詩文学」誌が1980年から1999年まで61冊、1999年誌名を「ブラジル日系文学」に変更し、最新号（2019年３月号）で61号と、過去53年間でのべ154冊発行されている。「ブラジル日系文学」編集長兼会長という“労多き過酷なボランティア”を10年間も続けてこられた中田みちよさんが、このほど桜井セリアさんにバトンタッチすることになったので、寄稿していただいた。）

移民受入れから150年のブラジルに学ぶこと

平野 司
（フリーランス・コンサルタント）

ブラジルの多様な移民労働力がなかったら

改正入管法が日本の国会で可決されるかという議論が行われていた2018年末、ある興味深い調査結果が目を引いた。

この研究とは、ブラジル応用経済研究所（IPEA）が実施した「もしブラジルが移民を受け入れなかったら、国の経済にどのような影響を与えていたか」というもの 。

ブラジルでは、世界でも最も遅い1888年に奴隷制が廃止され、その代替労働力として移民が導入された。主導したのは当時の花形産業だったコーヒー農園主だった。

それまでは、先住民族やブラジルを植民地化したポルトガル人、アフリカから導入された黒人奴隷が人口の大半を占めていたが、これを境にイタリア、ドイツ、アラブ諸国、日本から移民が渡ってくる。1872～1920年の約半世紀の間に、320万人もの移民がブラジルの土を踏んだという。

では、今でもブラジルには「外国人」の割合が高いのか？決してそういうわけではない。2010年の国勢調査によると、その割合は総人口のわずか0.3%だ。つまり移民一世の人口は今や大きく減少し、その後何代にも及ぶ「移民の子孫」が国民の大多数となっているのが、今のブラジルの姿なのだ。

「仮にブラジルがイベリア系移民（ポルトガル・スペイン）だけで占められていたら、移民を受け入れた今日と比べ、経済的な差がどのように出ていたのか？」―― この問いに対する答えを得るために、この研究では実に斬新な手法が用いられた。

ブラジル国民1億6,500万人分の名字をAIで分析して、イベリア系やその他の祖先の出自国と関連づける。その上で、労働雇用省・社会開発省・国税庁の保有する給与額や実業家の所得などのデータを掛け合わせ、祖先の国別に所得水準を導き出したのだ（褐色系・黒人は対象外としている）。※1

その結果、移民が導入されなかった仮のケースと比較して、移民を導入した現実の方が、より多くの富を生み出していたことが分かったという。

具体的には：

- 正規雇用者の給与は、移民を導入した場合のほうが移民を導入しなかった場合よりも約17%高い
- 祖先の出自国別で平均給与額を比較した場合、イベリア系を【100】とすると：
  東欧系　【105.30】　イタリア系【107.20】
  ドイツ系【108.70】　日系　【116.40】
- 2010年の1人あたり所得はR$781.75（約40,650円）だったが、移民が導入されていなければR$683.18（約35,500円）となっていた
- 日系人が多く集住する市では1人あたり所得の上昇効果が大きく、市の人口に占める日系人の割合が1%増える度に市民1人あたり所得がR$23.00（約1,200円）増加 ※2

日系コミュニティーのプレゼンス

ブラジルには190万人とも言われる日系コミュニティーが存在し、世界中の日系人人口の半分を占め、世界最大と言われている。その日系人の活躍がここまで明確な数字で示されたことには、この国で暮らすいち日本人としても誇りに感じる。それと同時に、移民がいてこそ今のブラジルが成り立っているということを認めることができるブラジルという国の懐の深さにも、敬意を抱かずにはいられない。

この応用経済学研究から学べること

さて、日本が外国人労働者に大きく門戸を広げようとしているのは、人手不足が最大の理由とされている。いささか乱暴な議論かもしれないが、奴隷制の廃止による労働力不足が移民受け入れのきっかけとなったブラジルの当時の状況にも似ているとは言えないか。

当時移民を受け入れたブラジルにしても、彼らが100年以上先の未来に国に富をもたらすことまでを予想できていたわけではないだろう。この研究成果にしても、移民受け入れから150年の時を経たブラジルがもしも違う歴史を歩んでいたら…というシミュレーションに過ぎない。

ブラジルと日本では、経済力や産業構造、社会背景も全く異なるため、単純に「日本でも移民を受け入れればきっといいことがある」とは思わないが、しかし昨今の外国人労働者の受け入れの議論を見るに、国としてのもう少し具体的なデザインがあってもよいのではないかとは思う。

アメリカのように世界中の頭脳を高度産業にひきつけたり、あるいは世界最高峰の教育機関に学生を呼び込むことに重きを置くわけでもない、あくまで労働力を求めての政策転換だ。その結果、国が豊かになり、国民の所得が向上するのか？という点は、曖昧なままとなっている

すでに指摘がなされているように、外国人「生活者」を受け入れる視点も欠けているようだ。彼らは労働力を提供するだけでなく、生活者にもなる。社会保障など国や自治体の財政にも影響を及ぼす存在になっていくことを意識しなければならないし、ならば富をもたらす移民こそ積極的に受け入れようという視点があってもいいはずである。

移民の受入れ側としてではなく、海を渡った移民当事者としての日本人が登場するこの研究成果は、何か大事な視点をもたらしてくれるものではなかろうか。

（日経COMEMO〔http://comemo.nikkei.com〕への2018年12月7日付投稿記事に基づき改版）

※1）Brasil Sem Imigrantes: estimativas de longo prazo baseadas em microdados de paradigma
http://www.ipea.gov.br/portal/index.php?option=com_content&view=article&id=34428&catid=411&Itemid=433
※2）為替はいずれも2010年当時のレート

アマゾンで始まった高砂香料ブラジル事業

碧川琢哉
（ブラジル高砂香料（有）取締役）

アマゾンからバイーアへ

高砂香料のブラジルへの進出は1963年にパラ州トメアスに設立された高砂アマゾン香料植物研究所に始まる。トメアスは州都ベレンからアマゾン川の支流を220キロほど遡った奥地にある戦前からの日本人入植地である。移民事業を行ったのは鐘淵紡績（のちのカネボウ）も出資する1928年に設立された南米拓殖という会社である。その後、日本人移民が持ち込み栽培に成功した胡椒が1950年代に高騰し、この地域に繁栄をもたらしていた。ただ、しばしば根腐れ病により大きな被害も受ける事から、トメアスの農業協同組合では単作の危険性を避ける意味で胡椒以外の栽培作物の移入と胡椒の増産および胡椒油の抽出工場の建設を希望していた。この話がトメアスと関係の深かった鐘淵紡績を通じ、高砂香料に持ち込まれた。1962年に当時の社長中西健次が現地を視察し、抽出工場への参画と香料植物栽培の試験農場を設ける事を決意し、25haの土地を購入する事となった。

その土地は原生林といってよく、農地造成から始めなければならなかった。初期の駐在員は電気も水道もない奥地でマラリアと闘いながら原生林の伐採を行い、2年をかけ苗木の農場をつくった。試験農場では日本国内、台湾、インドネシア、中国、インドなどで育てた挿木苗や種を持ち込み、シトロネラ、パチュリ、サフロール樟、リナロール樟、カシアなどの栽培に取り組んだ。その後、1964年に高砂香料は鐘淵紡績、トメアス農業協同組合との合弁でブラジル鐘紡化学を設立し、胡椒油の抽出工場の操業が始まった。

ただ、3年後、病害による胡椒の原料供給が止まったことにより合弁会社は解散を余儀なくされた。その後、1967年に高砂アマゾン香料植物研究所と既存のトメアス駐在所を統合し、BRASESSENCIA TAKASAGO LTDA.を設立した。数年間の試行錯誤の後、トメアス地区の過酷な自然環境での事業継続は困難と判断し、より香料植物の生育に適したと思われたバイーア州タペロアに拠点を移すこととなり、1975年にカシアを主としたプランテーションを開設した。

タペロアの農地には、カシア油の抽出工場も設置され、敷地面積1,300haの大農場に発展した。シナモンの一種で菓子や飲料などに使われるカシアは、高砂がブラジルに初めて持ち込み本格的なプランテーションを開設したものである。しかし、生育の良いカシアでも、市場の一般的なカシア油と成分組成が若干異なることから成分の調整が必要となるなど、現実的には採算のとれない状態が続いた。その後、2000年代までタペロアでの農場経営は続けられたが、採算が改善される見通しがないことから、2003年に完全撤退する事となった。40年に及ぶ幾多の高砂社員の尽力も空しく、ブラジルにおける香料植物栽培の歴史は幕を閉じた。

バイア州タペロアにあったBRASESSENCIA TAKASAGOのプランテーション

サンパウロでの調合香料事業へ

この間、高砂香料は、調合香料の製造販売事業にも進出している。1973年に香料原料の輸出入拠点としてサンパウロに駐在員事務所を設置した。その後、現地香料メーカーでのフレーバー（食品香料）の委託生産販売を開始し、1978年からはサンパウロ市サントアマロに自社工場を立ち上げ菓子や飲料などに使用されるフレーバー、香水・石鹸・洗剤などに使用されるフレグランスの開発と製造販売を始める事となる。その後、サントアマロ工場が手狭になったため1990年にサンパウロ郊外バルエリ市の新工場に移転したが、当時、年率3,000%にもおよぶハイパーインフレで経済が混乱する中で経営不振に陥り、大規模なリストラを余儀なくされた。事業は大幅に縮小せざるを得なかったが、その後は小規模ではあるが堅実な経営をつづける事ができ、2011年には、サンパウロから北に75キロ程のヴィニェード市にある現所在地に移転する事となった。46,000㎡の敷地にブラジルでの本社機能を有する本部棟、フレーバー部門とフレグランス部門がそれぞれ研究所、工場、マーケティングと営業部門を持ち活動している。従業員は100名程であるが、社長以下要職は全て現地化しており、日本からの駐在員は2名で運営している。

ヴィニェード市にある現TAKASAGO FRAGRANCIA E AROMAS LTDA社屋

1963年のトメアスでの高砂アマゾン香料植物研究所の設立から既に56年の歳月が過ぎようとしている。その間の多くの先人たちの想像を絶する苦労を偲ぶものは、トメアスの日本人移民資料館に保管されている「高砂香料工業株式会社アマゾン香料植物研究所」と書かれた看板のみとなってしまった。高砂香料はブラジルでの香料植物栽培からは撤退したものの、現在もインドネシア、マダガスカル、米国フロリダなどでの天然香料事業は継続されており、長期的視野にたった事業を展開している。近年、植物由来の再生可能な資源への関心が高まっているなか、天然香料確保の重要性は以前にもまして大きくなっている。その意味でもブラジルでの40年におよぶ香料植物栽培事業の経験は現在そして未来に生かされてゆく事であろう。

連載 ビジネス法務の肝

業務委託する際の注意点

柏 健吾
（TMI 総合法律事務所
日本法弁護士、
現在ブラジルで勤務）

事業運営するために第三者に業務の一部を委託することは不可欠であり、ブラジルでも一般的に行われている。業務委託の内容によっては特別法が適用されることもあり、また、紛争に発展しやすいケースもある。そこで、業務委託に適用される主な法律や留意すべき事項について解説する。

1. 業務委託一般

従前は、判例上、会社の非主要業務（清掃や警備など）以外は第三者に業務委託することは認められていなかったが、2017 年に、1974 年法 6019 号が改正され、主要業務の委託も可能となった。業務委託した場合、受託企業の従業員が委託者の会社内で業務に従事した場合、委託者は当該受託企業の従業員に対して、自社の従業員と同じ条件で、食事施設、交通手段、医療サービスなどを利用させる必要がある。また、受託企業がその従業員に対して賃金未払いがある場合、委託者は二次的な責任を負う。

2. 業務受託者との雇用関係

業務委託契約において、委託者が業務に従事している受託企業の従業員を直接指揮命令することが日本でも「偽装請負」と呼ばれ問題になっているが、ブラジルでも同様の問題がよく生じる。典型的な事例の一つは、実質社長一人の法人に販売業務などを委託していた場合に、当該社長が委託者から直接指揮命令を受けていたので雇用関係と同じ関係があったとして訴えてくる場合である。

3. 派遣

ブラジルにも日本の派遣と同様の制度があり、企業（派遣先）は、派遣契約のもと、他社（派遣元）の従業員（派遣社員）を自社業務のため使用することができる。派遣は、正社員の臨時的な欠員（産休など）や一時的な業務の増加といった例外的な場合のみ許されており、派遣期間は最大 180 日間（90 日間の延長可能）となっている。業務委託の場合と異なり、派遣の場合、派遣先が派遣社員に指揮命令することができる。派遣先は、派遣社員に対して、自社の従業員と同じ条件で、食事施設、交通手段、医療サービスなどを利用させる必要がある。また、派遣元が派遣社員に対して賃金未払いがある場合、派遣先は二次的な責任を負う。

4. 販売委託に適用される特別法

販売委託に関しては、契約形態が Agent 方式（販売代理店が単なる仲介者である形態）か Distributor 方式（販売代理店が製品を購入しエンドユーザーに転売する形態）かにより適用される法律が異なる。また、対象となる製品によって特別の法律が適用されることがある。詳細は、本誌 2018 年 9 月号（1646 号）を参照していただきたいが、契約を締結する際に特に留意する必要があるのは以下の点である。

契約期間の定めの有無	契約期間の定めの有無によって契約解除時の補償金額が変わる
独占権・独占義務の有無・範囲	適用される法律によって独占権・独占義務の捉え方が変わるため契約書で明記すべきである。また、一度独占権を付与すると変更するためには相手方の同意が必要になるため慎重に検討すべきである
特別の解除条項の有無	最低販売数に達しない場合の解除権を契約書で規定することなどが考えられる

5. 独占禁止法（下請業者の保護）

日本では、業務委託に際して、下請取引の公正化や下請業者の利益保護を図るための特別な法律（下請代金支払遅延等防止法。通称「下請法」）があるが、ブラジルではこのような特別法はなく、一般法である独占禁止法（2011 年法 12529 号）によって、下請業者が不当に不利益を受けないように保護されている。

ブラジル独占禁止法では、日本の独占禁止法と同様に、競争法に反する行為としていくつかの行為が例示されているが、業務委託の関係で留意すべきは、以下の点である。

再販売価格制限	日本と同様に、サプライヤーが、販売代理店のエンドユーザーに対する販売価格を制限すると、原則として独占禁止法違反となる
優越的地位の濫用	市場において支配的地位を有する者がその地位を濫用した場合は独占禁止法違反となる。「支配」は種々の事情を考慮して判断されるが、市場シェアが 20%以上であれば原則として支配的地位があると判断される。濫用の事例としては、自社の競合企業との取引の禁止、抱き合わせ販売などがある。

6. 個人情報保護法

クラウドサービスの利用など、自社が保有する個人情報の取り扱いを第三者に委託する場合、個人情報保護法（2018 年法 13709 号。2020 年施行予定）に従う必要がある。同法の詳細は本誌 2018 年 11 月号（1647 号）を参照していただきたいが、業務委託の観点で重要なことは、適切な個人情報保護の体制を整えている会社に業務委託することである。また、個人情報の漏洩等を防止するために適切な契約を締結することも重要となる（現時点では、ブラジルの個人情報保護法では業務委託契約において規定すべき事項は明記されていない）。

7. 著作権

システム開発を委託すると、受託者がシステムを構築することになるため、契約書に何も明記しないと、当該システムに係る著作権は受託者が有することになる。そのため、業務委託契約書に、著作権の譲渡について規定する必要がある。

相互協議（MAP）の改正

エドソン・コスタ
（KPMGサンパウロ事務所
移転価格税制ダイレクター）

吉田幸司
（KPMG サンパウロ事務所
パートナー）

2018 年 11 月 28 日に通達第 1846/2018 が公布され、相互協議（Mutual Agreement Procedure）の規定を改正した。

ブラジルにおいては過去からその制度はあるもののなかなか適用が難しいといわれている相互協議であるが、ブラジルと租税条約（DTT）を締結する国（現時点で日本も含め 33 か国）とは協議可能であり、相互協議を適用しやすくすべく 1）相互協議マニュアル、2）テンプレートが公表された。今回は、この改正された相互協議について説明する。

改正相互協議の概要

今まではどのような情報を提出するかが明確ではなく、納税者にとっては、適用が非常に難しい状況であったが今回の改正で申請に当たってのマニュアル及びテンプレートが用意され、提出すべき情報が明確となった。例えば、以下のようなものになる。

1. **相互協議を依頼する納税者識別情報**
2. **相互協議の対象となる国外関連当事者識別情報**
3. **相互協議の対象となる期間**
4. **相互協議の対象となる税制（租税条約を締結している税制の範囲で）**
5. **相手国において適用される規則及び手続きの概要及び租税条約で定められている税務上の取扱いと異なる場合のその取扱い**
6. **海外の税務当局との通信記録　等**

また、相互協議申請の内容はブラジル税務当局によって受領、分析され、その後納税者へ以下が通知される。

1. **申請内容が受理され、ブラジル国内にて解決される可能性**
2. **申請内容が受理され、2 国間にて解決される可能性**
3. **申請内容の却下**

なお、租税条約は、申請された相互協議の解決策を見つけることを義務付けておらず、共通の理解にたどり着かないケースもある点には留意しておく必要がある。

相互協議の移転価格税制への適用の可能性

相互協議の規定は、ブラジルにおいて二重課税問題を解決するために重要な仕組みとなりうる可能性がある。ただし、ブラジルにおける移転価格税制は例えば以下のように OECD ガイドラインに準拠していない。

項　目	OECDガイドライン	ブラジル移転価格税制
機能・経済分析	✓	
事前確認制度（APA）	✓	
利益に基づくメソッド	✓	
アイテムごとの分析		✓
アイテム / サービスごとに異なる分析手法の適用		✓
定められた利益率を用いる分析手法		✓

OECDの相互協議統計によると非常に件数は少ないもののブラジル企業から以下のように移転価格も含めて相互協議申請がなされている。

相互協議（ブラジル）				
2016年1月1日以前に開始された相互協議件数	2017年期首	申請件数	終了件数	2017年度末
移転価格案件	3	-	0	3
その他の案件	6	-	1	5
2016月1月1日以降に開始された相互協議件数	2017年期首	申請件数	終了件数	2017年度末
移転価格案件	4	2	1	5
その他の案件	0	6	0	6

（情報源：OECD website - 2017-MAP-Statistics_Brazil）

残念ながら上記の移転価格案件のうち終了した案件の内容については公開されていないため、どのように終了したかは不明である。

一方で参考までに日本では以下のような統計上の数値が公表されている。

相互協議（日本）				
2016年1月1日以前に開始された相互協議件数	2017年期首	申請件数	終了件数	2017年度末
移転価格案件	75	-	20	55
その他の案件	6	-	1	5
2016月1月1日以降に開始された相互協議件数	2017年期首	申請件数	終了件数	2017年度末
移転価格案件	33	24	6	51
その他の案件	4	4	2	6

（情報源：OECD website - 2017-MAP-Statistics_Japan）

このように OECD ガイドラインとブラジルの移転価格税制が異なっており、特にブラジルでは APA を認めていないこともあり、移転価格に関して相互協議を適用することは残念ながら現状ではまだ難しい部分もあるように思える。

最後に

ご存知の通り、ブラジルは OECD 加盟国を目指しており、アメリカもブラジルが OECD 加盟国となることを 2019 年 5 月に正式に支持を表明している。加盟に向けてブラジルが移転価格を含めて税制を改正する可能性あるとはいえる。

現在、OECD 加盟に向けて加盟国と協議を進めており、当該相互協議に関する改正は、ブラジルの OECD 加盟国に向けての 1 つの対応とも考えられ、相互協議を今後適用するブラジル企業も増えてくる可能性もある。ただし、移転価格制度については、大きな乖離があり、その乖離が解消されるかどうかは未定である。

ブラジルではブラジル移転価格税制への対応で二重課税となっているケースも多くあり、それを解消すべく、現時点においては、ブラジル税務当局の動向に注視しながらも適用可能な範囲にて二重課税を回避する方法を検討していくことも必要と言える。ブラジルでは、移転価格税制は本当に頭の痛い問題の 1 つである。

日本は第二の故郷 サッカーの発展に尽くす

ジーコ
（鹿島アントラーズテクニカルディレクター）

父がポルトガルからブラジルに渡ってきた移民なので、私の第二の故郷はポルトガルだというべきなのに、そうは感じていない。父が住んでいたポルトガルのトンデラという町を訪ねたこともあるが、特別な感慨はなかった。

日本こそ私の第二の故郷だと思っている。この国での生活のすべてを一生、忘れることはない。何しろ、1991年に鹿島アントラーズの前身の住友金属工業（現日本製鉄）蹴球団に加入したときから、日本全国どこへ行っても温かく迎えられた。鹿嶋市民、日本国民はずっと私を愛してくれている。ブラジルから日本に来るたびに「帰ってきた」という感覚を覚える。

サガン鳥栖でプレーした長男のジュニオールは日系人の女性と結婚し、私にとっての孫もできているので、日本との縁はより濃いものになった。

現役を引退していたにもかかわらず、住金蹴球団に加わり、もう一度、スパイクを履いたのはプロサッカークラブ、プロリーグを一からつくるという壮大なプロジェクトに魅力を感じたからだ。選手としてだけでなく、クラブの基礎を築く立場として日本サッカーの発展に貢献できたらと、最初から考えていた。もちろん、当時の日本サッカーのレベルは私が想定していたより低かった。すごいところに来てしまったなと思った。そういう中でプロフェッショナルとは何かということを選手、監督、コーチ、フロントスタッフにたたきこんだ。怒りをぶつけることも多かったが、それは、やればできるはずのことをしないときに限ったつもりだ。

ブラジルと日本では文化も風習も生活習慣も食事もかなり違う。それについては書物を読んで頭に入れていた。私が日本に来たのは日本サッカーを発展させるためであり、日本の文化を変えるためではない。だから、日本人の考え方や仕事の進め方を尊重した。そこを守らず、ものごとを進めてしまったのでは、人を侮辱することになる。

日本人はオーガニゼーションに優れ、ブラジル人とは違い、計画したことはきちんと実行する。来日当初は練習グラウンドに更衣室が備わっておらず、選手は家から練習着を着て車で通った。そんな状態だったのに、1993年のＪリーグの開幕までにクラブハウス、選手寮、スタジアムを完璧にそろえたのには驚いた。ブラジルでは絶対、こうはいかない。私の熱意に、すべての関係者が熱意で応えてくれたので、鹿島アントラーズというプロクラブをつくりあげることができた。

2018年夏、テクニカルディレクターとして16年ぶりにアントラーズに復帰した。就任時、チームの成績は思わしくなかった。選手が能力を出し切っているとは思えなかった。フロントスタッフ、監督、コーチ、選手の信頼関係が微妙に崩れているようにも感じた。組織が不安定になるのは当然だった。選手たちには、家に帰って自分の姿を鏡に映し、「全力を尽くしているか？」と自問してほしいと言った。「アントラーズの一員であるだけで終わるのではなく、取れるタイトルをすべて取り、歴史に名を残さなくてはいけない」という話をした。プロとしてのふるまいを要求し、日々の取り組み方を正した。

それ以来、選手の姿勢ががらりと変わった。自信を取り戻したチームは、クラブ史上初となるアジア・チャンピオンズリーグ（ＡＣＬ）制覇を果たし、節目の20冠に到達した。

日本との関りで唯一、心残りなのは日本代表を監督として率いた2006年のワールドカップ（W杯）ドイツ大会で早期敗退し、国民の期待に応えられなかったことだ。中田英寿、中村俊輔、稲本潤一、小野伸二という日本サッカー史上最強のミッドフィルダー（ＭＦ）を擁したのに、彼らのコンディションをそろえることができなかった。指導者としての知識をもっと身に付けていたら、という悔いがいまも残っている。

現在、アントラーズには三竿健斗、鈴木優磨、安西幸輝ら日本代表クラスの選手がいるほか、安部裕葵、町田浩樹が若い世代の代表に名を連ねている。私が日本代表の強化に何か貢献できるとしたら、アントラーズで選手を成長させ、日本代表に次々と送り込むことだろう。

アントラーズの選手たちに日々の生活を大切に過ごさせる。それが第二の故郷である日本への恩返しになると思っている。

（インタビュー、編集協力：鹿島アントラーズ）

日系人のこれから

伊豆山ありさ
（アントレプレナー）

ブラジルで生まれ育ったアジア人として、幼い頃から自分は日本との繋がりを強く感じていた。中学校で剣道をやり、放課後に通っていた日本語学校で「誕生日」という単語まで書けるようになった。親世代がカラオケで歌っていた昭和の曲や、おばあちゃんの手作り春雨やぼたもちにも親しみがあり、ブラジルでの生活に日本文化の欠片が確かにあると思っていた。

ところが、日本へ引っ越した時、外見によって求められていた文化リテラシーにはかなわなかった。13歳からビキニで海へ行き、高校生なのに「川崎」も読めず、挨拶でハグすると驚かれることもあった。街を歩いたら、中国人から中国語で話しかけられることや、韓国人から韓国語で話しかけられることはあったが、唯一「君はどこの人？」と聞かれていたのは日本人の方からだった。自分のアイデンティティであるはずのブラジルと日本、両方から却下されたと感じた日々は、やはり辛いものだった。

しかし、時間と共に時代と社会は少しずつ変化して、自分のアイデンティティを誇らしげに思えるようになってきた。常にどこかで感じていた「何人（なにじん）でもない」という否定的な思考から、「両方である」というプラスな考え方になった。日本人なのに仕事では人間性を重視し、ブラジル人なのに相手への敬意を持ち、海外に憧れ過ぎず、かつ閉鎖的ではない、ブラジルスパイスを加えた日本らしい存在は私みたいな日系人にしかないと最近気づいている。

自分個人だけではなく、2005年から2019年日本では、3.11、高齢者社会など、日本ならではの様々な難問と真剣に向き合わなければならない時がようやく来た。どうすれば良いのか、誰にもわからないかもしれない。けれども、未知の世界へ飛び出す勇気、柔軟性と吸収力、日系ブラジル人として生まれ育った経験から力をもらった。これさえあれば、どの状況でも動き出せると思っている。日本とブラジルのこれからの懸け橋に積極的に関わりたい。日本らしさのある住みやすい日本社会を創り上げたい。そんな明るい未来を築く責任感と楽しみでワクワク感が止まらない。

（編集部註：伊豆山さんは、サンパウロ出身の日系ブラジル人三世。13歳で日本へ移住、早稲田大学先進理工学部卒業と同年度に美容師免許取得。日本最大級のスタートアップイベント「SLUSH TOKYO」2019年度の企画・プロデュースを手掛け、現在は着物アーティストのPRや大手広告企業のクリエイティブアシスタントまで、幅広く活躍中。）

ジャーナリストの旅路

引き継ぎたい五輪ボランティアの笑顔

宮本英威
（日本経済新聞社国際部次長、前サンパウロ支局長）

「ボンジア（おはよう）！ボンジア！ボンジ～ア！」。現地で取材した2016年のリオデジャネイロ夏季五輪では、ボランティアのとびきりの笑顔と陽気な声が印象に残った。会場に向かう道筋で、プールの監視員が座るような高台に腰掛けた案内のブラジル人は、声を張り上げていた。来場者の反応が鈍いと、手にはめた、方向を指さす大きなスポンジを果敢に振り回しながら「元気がなーい」などとあおって、会場の雰囲気作りにひと役かっていた。

五輪の期間中、競技場にたどり着くのはひと苦労だった。主として東京からの取材陣の移動のために、あらかじめ確保していた専用レーンを走れる車を使っても、交通渋滞で時間はよめない。契約した運転手はいずれも地方から一時的な出稼ぎでリオに来ており、通常は別の仕事をしていた。特にサーフィンのコーチをなりわいにしていた運転手は道に精通しておらずすぐに迷う。大会数日前にようやく開通した公共交通機関を使う場合は大混雑。会場の入り口にたどり着くだけでもひと苦労なのだが、入場時の身体検査には大行列が控える。しかも炎天下だ。そんなときにボランティアの明るい声と表情に心は和み、何度となく元気をもらった。

リオ五輪では、ボランティアに課題はあった。経費削減のために7万人から5万人に減らし、実際には3割に相当する1万5000人が欠勤状態になったとされる。会場の案内を頼んでも満足がいく回答が返ってくるのはまれだった。欠員は出勤者の過剰労働につながり、昼食さえ満足にとれなかった人もあった。それでも接した人々はみな陽気だった。

20年の東京五輪に向けては、ボランティアの「選考」が2月に始まった。目標としていた8万人を大幅に上回る20万人超が応募した。面接で、活動の内容や場所を擦り合わせていくという。日本は過去にも大規模な国際大会の運営を手がけており、案内や情報提供の質は改善されると想像する。

一方でブラジル人の陽気な対応ができるかと思うと心もとない。リオでは、普段は大観衆の前でプレーする機会に恵まれない知名度が低い五輪競技やパラリンピックの選手は特に、大会会場の雰囲気をたたえるコメントが目立った。東京大会のボランティアに応募した外国人は全体の36%を占める。組織委によると「恐らく過去で最も多い比率」だという。リオ大会を経験した人々が笑顔を持ち込んできてくれるとうれしいのだが。

連載 文化評論

ジョルジ・アマード『奇蹟の家』再訪 ブラジル学との関係性

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

ジョルジ・アマード『奇蹟の家』表紙

ジョルジ・アマード『奇蹟の家』

文豪ジョルジ・アマード（1912～2001）の後期作品群のなかでも本人が「自分の作品のなかでも私が一番評価し気に入っている」と認めている作品が『奇蹟の家』（原作1969年、原題Tenda dos Milagresは主人公の友人がやっている工房の屋号なので、『奇蹟の家』よりも『ミラクル堂』あたりが適訳かもしれない）である。

この作品はネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督によって映画化されたが、この脚本作りにアマードも参加（共同執筆）していることもあり、この映画『奇蹟の家』（1977年）のほうが原作で訴えたかったテーマがより凝縮されてわかりやすくストレートに描写されているのだ。

というわけで、小説を読み直してから、この映画も見直して、『奇蹟の家』ワールドを再訪することになったのだが、改めて、この作品の魅力にハマってしまった。ブラジル社会のモザイク的混淆性、人種偏見の功罪を巡る議論に対する作家アマードの思弁を監督ネルソン・ペレイラが映像化したのだから、多元的に面白いのは当然なのだが。

この名画の最初のシーンはこんな感じだ。米国のノーベル賞学者リビングストン博士（原作では、レヴェンソン）がサルヴァドールでの記者会見で、バイーアの生んだ偉大な学者ペドロ・アルカンジョを讃える発言をする。ブラジルの人種問題を理解するには、在野の研究者アルカンジョの著作が不可欠である、との発言に、バイーア中のメディア関係者は慌てふためくことに。

なにせ居合わせたブラジルの記者たちは誰も、人種混淆肯定論者アルカンジョのことを知らなかったからだ。地元新聞社は社主自らが乗り出してペドロ・アルカンジョ特集を組め、との指示が出て、学芸部からも社会部からも記者が駆り出されるが、出来の悪い新聞記者たちは右往左往するばかり。テレビ局も同様の無様な騒ぎとなる。といったドタバタを経て、長い間忘却されていたアルカンジョが“奇蹟的に”再評価されることとなり、州政府主催で彼を讃える諸行事が進められ、新聞では企業広告までが偉大な学者アルカンジョを褒めたたえることになる。まさに著名な米国人学者という“外圧”のおかげだった。

映画では、ここからフラッシュバックして1875年生まれ（原作では1868年生まれ）のアルカンジョの半生が描かれていく。医科大学の用務員として働きながら、独学で社会学や人類学を修め、「バイーア民衆の生活」「バイーアの生活習慣におけるアフリカの影響」といった論文を発表するが、ブラジルが民主的な社会となる唯一の道は人種間の混淆である、とのアルカンジョの主張は、“科学的”白人優越論に支配された当時のエリート層から徹底的に批判され、職場からも追放されてしまう。

社会人類学者チャールズ・ワグレー

1970年のベストセラー（初版7万部！）小説『奇蹟の家』は、ブラジルが真に民主的な社会となる道は人種間の混淆である、という作家アマードの確信的理念をフィクション上の人類学者アルカンジョに語らせた作品であるが、最初に登場した米国人学者のモデルとされるのが、人類学者チャールズ・ワグレー(1913～1991)である。

ワグレーはノーベル賞こそ受賞していないが、コロンビア大学教授としてラテンアメリカ・ブラジル研究をリードし、同大学ラテンアメリカ研究所所長としてばかりでなく、アメリカ人類学者協会会長としても活躍した学者だ。文化人類学の父と称されるフランツ・ボアズの弟子であるが、1940年代から60年代にかけて米国における人類学の発展に多大なる貢献をしたことは周知の通りだ。

そうした”大物”だったからこそ、彼をモデルにした米国人学者を、アマードが自作のなかでノーベル賞受賞者に”格上げ”したのだろう。

彼は、『ラテンアメリカの伝統』（1968年）において、ラテンアメリカ文化全体を9つのサブカルチャー類型に分類している。すなわち、①部族原住民型、②モダン・インディアン型、③小農民型、④エンジェーニョ（旧式砂糖農場）型、⑤ウジーナ（近代砂糖農場）型、⑥町型、⑦都会上流階級型、⑧都会中間階級型、⑨都会労働者階級型、という九つであるが、この分類については固定的にはみていない。一つの類型から他の類型に変わることは、常に起きていると、なかなか柔軟な視点を持つ人類学者であった。

彼のブラジル論は、『ブラジル入門』（初版1963年、改訂版1971年）において詳細に展開されているが、「ブラジルは実に多様であるが、統一的な国民文化を有する」、「ブラジルは多くの近代国家以上に、国民国家の規範に近い。多様性を含む統一性というこの逆説こそ、ブラジルを真に理解するための基礎である。」という主張に集約されている。

最近のブラジル政治経済事情（外務省中南米局提供情報並びに現地メディア報道他より）

ソフトバンクグループ等による伯新興企業への投資

5月13日付けエスタード・デ・サンパウロ紙は，ソフトバンクグループ等によるブラジル新興企業への投資に関する記事を掲載している。概要は以下のとおり。

1） ブラジルで最も価値が高い新興企業の背後には、多額の資金を保有し、失敗をおそれない投資家がいる。投資家は投資ファンドを創設し、10億米ドルを超えた市場価値のNubank、Movile、Stone、99、Pag Seguro、Gympass等の伯企業を専門としている。2011年以降、約130億米ドルが投資されている。

2） 中南米ベンチャーキャピタル等協会のデータによれば、昨年、ファンドの投資は13億米ドルとなり、2017年度よりも５１％増加した。この金額は、中南米における全投資額の約65%を占め、今年も増えると予想されている。３月中旬に、日本の大手ソフトバンクは、この地域の新興企業に投資するための50億米ドルのメガファンドの立ち上げを発表した。資金の一部がブラジル企業にも割り当てられることが期待されている。

3） こうした投資は、monashees、Kaszek、Redpoint eVenture、Valor Capital、500 Startupsなどのファンドによる近年に開始された動きの一部である。これらのファンドの最前線には、大企業の元幹部、外交官、事業を売却した起業家などがいる。

税制改革、下院憲法・司法委員会での承認

5月23日付エスタード紙は、5月22日に下院憲法・司法委員会において議員立法による税制改革案が承認された旨報じている。概要以下の通り。

1） 22日、下院憲法・司法委員会は、バレイア・ロッシ議員（MDB：伯民主運動）により提出された議員立法案を承認した。議員立法案（憲法修正案）は、ゲデス経済大臣が策定している税制改革案（政府案）の議会への提出を待たずに議会に提出された。

2） 憲法・司法委員会では、法案が憲法の基本原則に反しないかのみについて審議し、具体的な内容については今後設置される特別委員会で審議される。憲法・司法委員会の審議において、PSOL（社会主義自由党）を除く、他の政党は賛成票を投じた。

3） 議員立法案はエコノミストのベルナルド・アピー氏の考えに基づき、５つの税（ICMS（商品流通サービス税：州税）、PIS（社会統合基金）、Cofins（社会保険融資負担金）、ISS（サービス税：市税）及びIPI（工業製品税））をIBS（商品サービス税）に統合するというもの。

4） マイア下院議長は、６月末までは行われないであろう年金制度改革の票決後に、税制改革案を本会議で審議することについて、ゲデス経済大臣と合意した。

キャンパス・コラム

留学生活での気づき～カンピーナスでの「ビーサン」文化

梨本卓也
（神田外語大４年生）

ハワイアナスのビーチサンダルと言えば、世界でも人気を博し、しばしばファッションシーンにも登場する。しかし、当のブラジルではどうか。そこには、彼らなりの使い分けが存在するのである。

私はサンパウロ州郊外に位置する同州立カンピーナス大学で留学を行った。かつて富裕層が多く暮らしていた大学周辺地域はBarão Geraldo（ジェラルド男爵）と呼ばれ、今でも大きな家が軒を連ねる。かつての形相を保ったまま、大学生の街となったBarão Geraldoは緑が豊かで開放的な雰囲気である。大学の授業にはパジャマのような格好で行くのが一般的で、Colação と呼ばれる卒業式典にも半袖短パンでいくという具合であった。襟付きのシャツ、腕時計などを着用して大学に行く日本の学生と比べると、Barão Geraldoの学生たちはあまり見た目にこだわらないという印象があった。しかし、そんな彼らもTPOを弁えて気にしているところがあった。それは、足元である。

彼らはビーチサンダルに対して、ややマイナスな考えを持っているのだ。大学の授業や友達同士で飲みに出掛ける時などは皆ビーチサンダルで出掛けるが、若干の礼儀や品格を問われる場においては、暗黙の了解としてビーチサンダルの使用が避けられていた。先に挙げたColaçãoでの服装も、半袖短パンの参加者はいても、ビーチサンダルを使用している者は誰もいない。また、逆を言えば、どんな格好をしていようともしっかりとスニーカーなどを履いていれば、ある程度の礼儀や品格は保証されるという具合であった。

ビーチサンダル使用のご法度もいくつかあった。私は、よく長ズボンにビーチサンダルを組み合わせていたが、それが「変」だと認識されているのに気が付いた。熱帯気候の地域では、長ズボンの使用は「何となく」フォーマルな印象を与えるため、そこにビーチサンダルを組み合わせることは何とも格好が付かないのである。我々で言うところの、寒さが厳しいときに女子高生がする、スカートの下に長ズボンを履くぐらいの感じであろうか。要するに、なんだかチグハグなのである。

あるブラジル人の友人に「ブラジルにいる日本人はどこへでもビーチサンダルを履いて出掛けるよね。」と言われたことがある。私たちはビーチサンダルの使用意義など考えるにも至らない。ブラジル訪問の際に、ビーチサンダルを履く前に考えてみると面白いかもしれない。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆◆

『現代ブラジル論』
（堀坂浩太郎・子安昭子・竹下幸次郎 / 共著）
四部構成による現代ブラジル解説書。政治、経済・ビジネス、国際関係、それぞれの側面から1985年の民政復帰以降の現代史をコンパクトに概説したうえで、第三部の「歴史・地誌・人と社会」では長いスパンで歴史や地理を復習し、第四部「独立200周年（2022年）に向けて」において、ボルソナーロ外交が「ブラジルの落ち着きどころをみつけていくのではないか」と新政権に期待を寄せている。上智大学のブラジル研究者三名による新書版の共著。
（上智大学出版　2019年4月　350頁　2,000円＋税）

別冊　環『開かれた移民社会へ』
在留外国人数260万人のうち定住者はほぼ60%となり、外国にルーツを持つ者（国籍上は日本人）を加えると350万人に及ぶ。現政権は、「人手不足の解消のため」「外国人材の受入れは喫緊の課題だ」として入管法の改定法案を成立させたが、一貫して「移民政策ではない」と主張している。実質的な移民社会への拡張路線を様々な観点から論じている特集号だが、「元」移民の子供たち4名による座談会は読者を引き込むパワーあり、熟読の価値あり。
（藤原書店　2019年5月　312頁　2,800円＋税）

『還流する魂』（三山喬著）
沖縄は、かつて住民の1割以上を海外移民に送り出していた。大新聞（朝日）記者を経てペルーを拠点に6年間南米全域の日系社会を取材した経験を有するフリージャーナリストが、2016年10月の「第六回世界のウチナーンチュ大会」に参加して“沖縄魂”を再発見し、重層的な沖縄移民史を読み解くべく取材を重ねた成果が本書だ。サブタイトルの如く「世界のウチナーンチュ120年の物語」だが、沖縄移民史の複層性を知るための必読書だ。
（岩波書店　2019年4月　240頁　2,200円＋税）

『ミルトン・ナシメント』
（マリア・ドロレス著、荒井めぐみ訳）
唇がタバコを吸うように尖っていたため、ビトゥーカ（吸い殻）というあだ名で呼ばれることになった少年は長じてブラジルを代表するシンガーソングライターとなる。今やブラジル音楽界のレジェンドとなったミルトン・ナシメント（1942年生まれ）の本格的評伝の翻訳。原題の「トラヴェシア」とは航海の意味で、作家G・ローザの『大いなる奥地』から採られているが、ミルトンの人生観そのものだ。
（ディスクユニオン　2019年5月 416頁　3,200円＋税）

『光のパシスタ』（宮寄道男著）
横浜のサンバチーム「エスコーラ・ヂ・サンバ・サウーチ」で長年活躍してきた著者による、サンバへの強い思いを小説の形で文章化した作品。主な舞台は浅草サンバカーニバルだが、観戦ツアーで参加した名門サンバチーム「マンゲイラ」とのリオでの体験も反映された、著者の私小説的要素も含むフィクション文学だ。様々な人、男女が出会い、友情や愛情が育まれ、「人生は出会いの芸術」であることを再確認することになる。
（志學社　2019年5月　302頁　1,500円＋税）

新 !!「ブラジルあれこれ」!!

労働訴訟――ブラジルで2度被告になった話

ポルトアレグレで勤務していたある日のこと、優秀な秘書から夫の仕事の都合で残念ながら退職したいと言ってきた。よく気が付く秘書でその勤務ぶりを評価していたこともあり、退職にあたっては、本人の希望通り推薦状のような文書まで与えた。ところが同人退職から２週間ぐらい経った時、突然労働裁判所から召喚状が届いた。同人が待遇面の不満等を理由に労働裁判所に訴えたことが分かった。退職時の同人の友好的態度もあり、また、同人の夫はペトロブラスに勤務し、かなり高給取りだと聞いていたので、同人が労働裁判所に訴えたことを理解するのにしばらくかかった。

ところが、召喚状に応じ、労働裁判所に赴いた際、そこでは、さらに驚きの光景が展開していた。礼儀上一応同人の弁護士に挨拶したが、弁護士は、挨拶もそこそこにどこかへ消えてしまった。よく観察してみると、弁護士は、裁判が行われている複数の小部屋を渡り鳥のように行き来していたのである。当方の弁護士によれば、この弁護士は労働訴訟専門の弁護士で、一人でかなりの案件を担当しており、その日は複数案件を掛け持ちしていたとのことであった。

ブラジル労働法は、昨年大幅に改正されたが、改正前には、労働者の解雇には、組合の介入が必要であり、労働者が組合に立ち寄る際、専門の弁護士が待機しており、その場で労働者を「勧誘」していたということらしい。旧労働法においては、労働者側が訴訟費用を負担することがなかったことも、労働訴訟の頻発に拍車をかけていたと思われる。昨年在京ブラジル大使館で行われた改正労働法に関するセミナーに講師として参加したブラジル人弁護士は、法律の改正後、Rio州では、１日あたり約3500件あった労働訴訟が、約400件まで急減したと述べていた。

労働訴訟関係で次に驚いたのは、ベレンで勤務していた折、警備員が起こした訴訟の件で召喚状が届いた時だ。警備員は警備会社から派遣されており、当方が訴えられることはないと信じていたのだが、この期待は見事裏切られた。実は、警備会社が経営困難を抱えて給与を未払いのまま放置していたため、当方がなんと第２被告になったというわけだ。訴訟の当事者になることによる混乱を避けるため警備員を直接雇用しなかったのに、このような対策は何の意味も持たないということか。上記のブラジル人弁護士にこの点も質問したが、その返事は、現行法の下では、引き続き第２被告の制度は維持されているというものであった。（MK）

価値を生み出す厳選された情報

中南米経済速報

経済情報を毎週月曜日にお届けします。地域経済圏の動き、インフラ整備やエネルギー・資源開発、各国のマクロ経済、投資案件、労働問題などを日本語でお読みいただけます。

■購読料：14,000円／月（税別）

CRONICA（クロニカ）

政治・治安情報を速報でお届けします。月～金に速報版を、火・金にレギュラー版を配信します。社会情勢、犯罪情報、武器密輸、麻薬問題、自然災害などを取り扱います。

■購読料：30,000円／月（税別）

有限会社イスパニカ
〒107-0052
東京都港区赤坂2-2-19
アドレスビル
Tel. 03-5544-8335
Fax. 03-5544-8336
Email: hola@hispanica.org

通訳・翻訳、語学研修も行っております
イスパニカ　で検索！

hispánica

日本ブラジル中央協会 ―― イベントのご案内＆お知らせ ――

イベントのご案内　HPの申込みフォームからお申し込み下さい。

9/4　懇親ゴルフコンペ
2018年３月以来、１年半振りになりますが、
在日ブラジル商工会議所との共催で、懇親ゴルフコンペを開催します。
日　時：2019年9月4日(水) Tee off：米山コース　アウト 9:10～
場　所：高坂カントリークラブ(埼玉県)
参加費：18,500円／人
定　員：７組 28名

9/28　ブラジル 駐在員家族(駐在妻)のための渡航前セミナー
限定最大８～９名様の少人数での開催
新生活にむけて「どれくらい準備している…？」
日　時：2019年9月28日(土)
1部：9:15-12:30（3時間15分）対象者：渡航されるお子様なし
2部：14:00-18:00（4時間）対象者：渡航されるお子様あり
場　所：日本ブラジル中央協会 会議室

10/10　竹下幸次郎　拓殖大学 准教授 講演会（予定）
演題「ブラジル経済情勢」（仮題）
日　時：2019年10月10日(木)15：00～
場　所：新橋ビジネスフォーラム
住　所：港区新橋１－１８－２１　第一日比谷ビル8階
※ 詳細は追ってＨＰにてご案内します。

2019年 秋期ポルトガル語講座 9月前半に開講！
詳細はこちらから　http://nipo-brasil.org/portugal/
当協会では、“楽しく学ぼう！学んで話せるポルトガル語！”をモットーに実用ポルトガル語講座を開講しております。
日程、クラスなど、詳細が決まり次第、HPにアップします。

法人・個人・学生　皆様のご入会を心よりお待ちしております

新規会員募集中
会員数（2019年7月現在）　法人会員　127社　個人会員 約340名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典
1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます（会員限定イベントへも参加いただけます）
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費
法人会員　1口（2口以上）　20,000円　／　個人会員　1口（1口以上）　10,000円
※入会金は不要です

お申し込み
《日本ブラジル中央協会公式HP》
http://www.nipo-brasil.org　日本ブラジル中央協会　検索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。

SALTON
Intenso Tannat
インテンソ タナ

ブルーベリー、ブラックベリー、プラムなどの果実と、キノコ、ナッツ、ユーカリ、ミント、黒コショウやその他のスパイスの香りとタンニンのバランスが非常によく取れていて、品の良さを感じるエレガントなワイン。お料理を引き立て、食卓を華やかにしてくれるワインです。

ぶどう品種	タナ
アルコール度数	13%
飲み頃	16-18度
相性の良い料理	サラダ、シーフード、魚料理、タイ料理、ローストチキン

ブラジルNo.1のワイナリーに輝きました！

ブラジル市場において、35の国内外のワイナリーの中でサルトン社が
最もパワーのあるワイナリーとして選ばれました。（2019ワインインテリジェンス調査）

フラワーズ
ブランコ

マルヴァシア 50%
マスカット 50%

1,900円

日本で飲もう最高のワイン2018
愛好家部門 プラチナ受賞！
専門家部門 シルバー受賞！

ベストオイスターワイン2018受賞！
いわがき春香賞受賞！

フラワーズ
ティント

カベルネソーヴィニョン 50%
メルロ 50%

1,900円

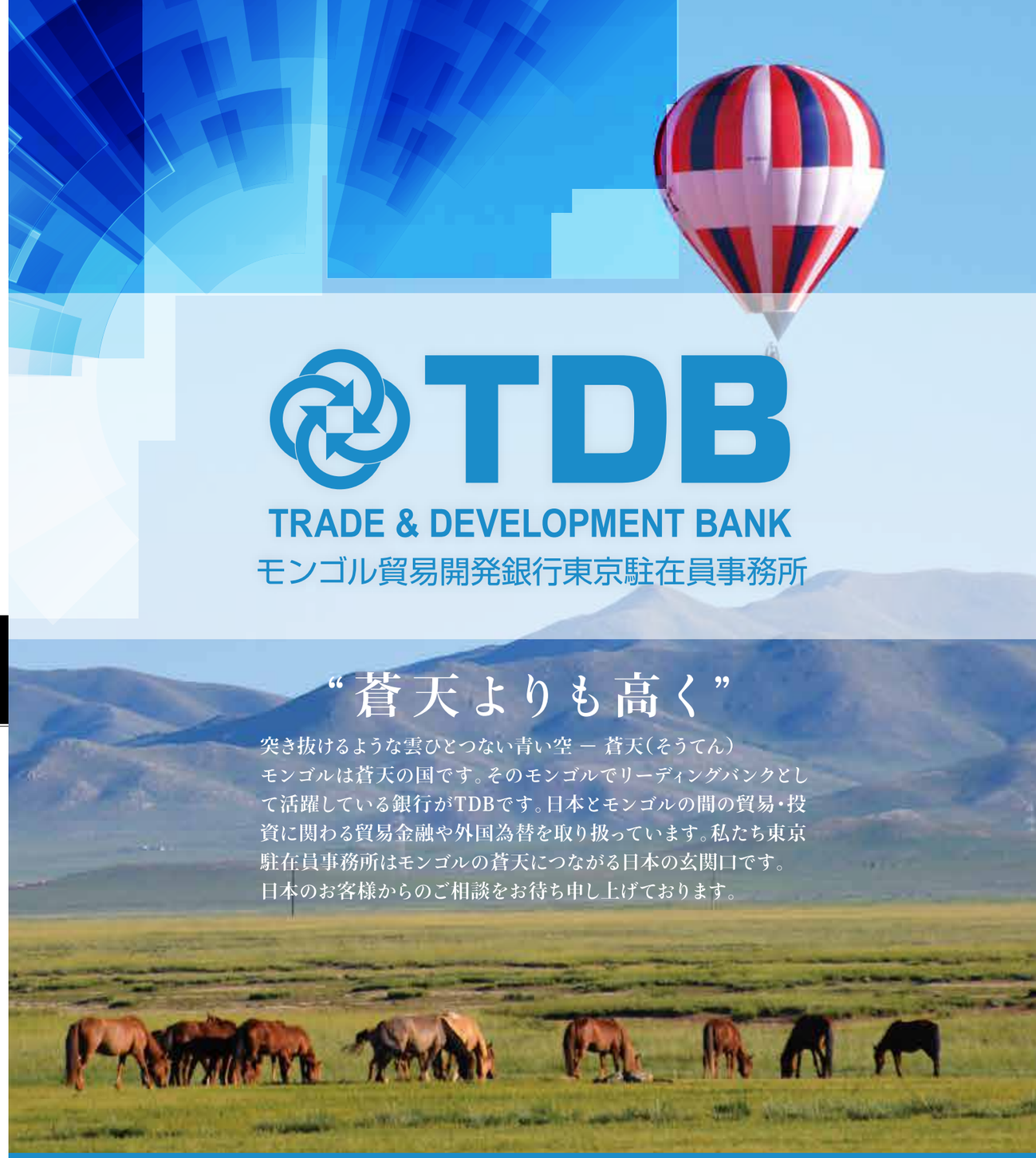
ラムワインコンテスト
グランドラムワイン賞受賞！

株式会社 DRINK OF BRASIL
〒164-0012 東京都中野区本町3-14-12 Tel：03-6276-3315 Fax：050-3730-0386
Mail：info@dobrasil.co.jp http://dobrasil.co.jp
https://www.facebook.com/dobrasil55/

ブラジル赴任の前に
ビジネスで使えるポルトガル語を

ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia（ブレイジア）では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia（ブレイジア） 運営：株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階 TEL03-6263-0716
お問い合わせは E-mail:brasia@kanwajuku.com HP:http://brasia-j.com/



TDB
TRADE & DEVELOPMENT BANK
モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所

“蒼天よりも高く”

突き抜けるような雲ひとつない青い空 ― 蒼天（そうてん）
モンゴルは蒼天の国です。そのモンゴルでリーディングバンクとして活躍している銀行がTDBです。日本とモンゴルの間の貿易・投資に関わる貿易金融や外国為替を取り扱っています。私たち東京駐在員事務所はモンゴルの蒼天につながる日本の玄関口です。
日本のお客様からのご相談をお待ち申し上げております。

モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所
〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-4-1
丸の内永楽ビル2303
TEL：03-4588-3945
FAX：03-4588-3947
http://tdbm.jp/ 詳しくはコチラ➡

◉ 最寄り駅：東京メトロ東西線大手町駅B1出口直上

NIPPON STEEL

新日鉄住金は日本製鉄へと社名が変わりました。